

みことばは私の喜びです



詩篇119篇における22の瞑想

はじめに

空知太栄光キリスト教会牧師 銘形 秀則

◆詩篇には、「アルファベット詩篇」と言われるものが9つ(9篇、10篇、25篇、34篇、37篇、111篇、112篇、119篇、145篇)あります。ヘブル語のアーレフから始まってターウまでの22文字を頭とする22の単語によって、各節がはじまっているというきわめて技巧的な詩篇です。ひらがなのすべての文字を使ってつくられた「いろは歌」-「色は匂へど散りぬこれは「いろはにほへどちりぬるを・・・」という文字を覚えさせるのに有効な歌と言えます。

◆技巧的でありながら、内容は必ずしも乏しくはないというのが「アルファベット詩篇」の不思議な魅力です。ただし、日本語で訳されている詩篇では「アルファベット」の感覚は全くありません。

◆本稿では、「アルファベット詩篇」の最も有名な詩篇119篇を取り上げて、22のブロックから、それぞれひとつのキーワードを取り出して瞑想していきたいと思います。

(作成日 2008/05/07)

目次

א אールフ (v.1~8) 「全き道」
ב ベース (v.9~16) 「守る」
ג ギメル (v.17~24) 「開眼」
ד ダーレス (v.25~32) 「走る」
ה ヘー (v.33~40) 「道」
ו ワーウ (v.41~48) 「愛する」
ז ザイン (v.49~56) 「生かす」
ח ヘース (v.57~64) 「顧みる」
ט テース (v.65~72) 「学ぶ」
י ヨード (v.73~80) 「喜び」
כ カーフ (v.81~88) 「渴望」

ל ラーグド (v.89~96) 「全き愛」
מ メーム (v.97~104) 「愛の確証」
נ ヌーン (v.105~112) 「光」
ס サーメク (v.113~120) 「愛と憎」
ע アイン (v.121~128) 「価値転換」
פ ペー (v.129~136) 「悟り」
צ ツアーディ (v.137~144) 「熱心」
ק コーフ (v.145~152) 「呼ぶ」
ר レーシュ (v.153~160) 「憐み」
ש シーン (v.161~168) 「賛美」
ת ターウ (v.169~176) 「選択」

✕ アーレフ(v.1～8) 「全き道」

◆「幸いなことよ。」ではじまるフレーズを持つ詩篇は、119篇を含めて、詩篇全体で17篇あります。それは神と人(あるいは民)とのかかわりにおける求道性の結論的フレーズです。このフレーズの中に、旧約の人々が幸福をどのように見、そして経験していたか知ることができます。「幸福への求道性」、それは「永遠のいのち」と言い換えることができます。決して完成体ではなく、常に進行形です。新約では「永遠のいのち」ということばで総括できます。

◆詩119篇における「幸い」は「全き道を行く人々」、すなわち「主のみおしえによって歩む人々」。あるいは、「主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々」と結論づけています。ここで述べられていることが、続く21のブロックでも追求され展開されます。

◆詩篇特有の並行法によって、「全き道を行く人々」(Perfect way)とは「主のみおしえによって歩む人々」のことであり、「主のみおしえによって歩む人々」の説明が、次節で「主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々」だとしています。ここには「主のさとしを守る」と「心を尽くして主を尋ね求める」ことが一つとなっています。

◆「守る」とは、神が私たちに求めておられる戒め(律法)を堅く守ることであり、それは「当為」(当然なすべきこと)です。しかし、「心を尽くして主を尋ね求める」ことは、「当為」ではなく、「自意」(自分から求めること)によるものです。この「当為」と「自意」が重なることこそ、「主のみおしえによって歩む」ことであり、「全き道を行く」ことです。

「全き道」を歩んだ唯一のモデルは、神の御子イエス・キリストです。このイエスこそ、その道の創始者であり、完成者です。

◆第一ブロック(1～8節)では、作者が、「主の道」(3節)と「私の道」(5節)がしっかりと重なることを求めています。私たちは生まれながらにして「心を尽くして主を尋ね求める」ことのできない者です。どのようにして、その二つの道が重なるのか、それが詩119篇全体の瞑想のテーマだと信じます。

付録 1

●ヘブル詩の基本的構造の特色は「並行法」(対句法)と呼ばれる叙述法です。その叙述法は、パラレリズムと呼ばれ、大きく分けて三つあります。

(1) 同義的並行法・・・最初の行で述べられたことが、次の行では他のことばで繰り返されること

(例) 「全き道を行く人々」
⇒「主のみおしえによって歩む人々」

(2) 反語的並行法・・・最初の行と次の行が逆の意味で繰り返されること

(例) 「高ぶる者どもは、私を偽りで塗り固めました」
⇒「しかし、私は、あなたのみおしえを喜んでいます。」

(3) 複合的並行法・・・最初の行を次の行が補足することで統一、総合すること

(例) 「苦しみにあったことは、私にとってしあわせでした。」
⇒「私はそれでああなたのおきてを学びました。」

付録
2

	新改訳	口語訳	共同訳	関根訳	ATD	岩波書店
1	みおしえ	おきて	律法	律法	おきて	律法
2	さとし	あかし	定め	あかし	証し	定め
4	戒め	さとし	命令	法	命令	指図
5	おきて	定め	掟	定め	定め	掟
6	仰せ	戒め	戒め	命令	戒め	命令
7	さばき	おきて	裁き	戒め	秩序	法
8	定め	定め	定め	ことば	定め	掟
9	ことば	み言葉	御言葉	み言葉	ことば	ことば

◆上記のように、詩119篇では「律法」をさまざまなことばで表現しています。これらのことばのひとつひとつの意味を探ることは、さほど重要ではありません。ダイヤモンドはカットされた面を多くもっていることでその輝きを放つように、律法も多くの面をもつことでその豊かな輝きを表していると理解すべきです。このことは「愛」についても言えます。愛は、「親切」「思いやり」「優しさ」「いつくしみ」「忍耐」「配慮」「あわれみ」「恵み」「自発性」といった多くの面を含んでいます。

ユ ベース(v.9~16) 「守る」

◆第2のブロック(9~16節)には大いなる問いがあります。その問いとは、「どのようにして、若い人は自分の道をきよく保てるか」というものです。なぜ「若者」なのか？ 若い人はことのほか、未熟さのゆえに神の道から迷い出してしまうことが多いからでしょうか。それとも新しい世代の若者のうちから主の祝福の道を歩ませるべく教育的配慮からでしょうか。いずれにしても、この問いに対する答えは「主のことばに従ってそれを守ること」だとしています。

◆ここで「守る」ということばをどのように理解するかが大切です。なぜならこのことばは、詩119篇の中で、なんと72回も使われていることばだからです。しかも各ブロックに登場しています。「おきてを守る」という言葉は、何か窮屈で自由のない義務感を予想します。しかし詩119篇では、「守る」ということが当為であるとともに、自意を表す重要な言葉となっています。つまり、「守る」とは、神ご自身のことばである戒め(律法)に、喜んでお従いすることを意味しています。

◆イエス・キリストが最後の晩餐の席で弟子たちに語った「新しい戒め」というものがあります。その戒めとは「あなたがたは互いに愛し合いなさい」というものです。しかも、その相互愛には、「わたしがあなたがたを愛したように」という愛が前提となっています。

またイエスは、「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。」「だれでも、わたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はそのを愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます」とも語られました。(ヨハネの福音書14章21～23節)

◆ここでは、「愛すること」と、「神の戒めを守ること」とが同義とされています。ですから、詩119篇にある「守る」「守ります」とは、「愛する」「愛します」とも言い換えることができます。

◆第2のブロックには、他にも、「自意」を表すことがあふれています。第一ブロックにも登場した「心を尽くして、あなたを尋ね求めています」(10節)という表現。続いて、「あなたのみことばを心にたくわえます」(11節)「あなたのさとの道をどんな宝よりも、楽しんでいきます」(14節)「思いを潜め」(15節)「目を留めます」(聖書では「目」とは、しばしば自分の存在のすべてを指します)「あなたのおきてを喜びとします」(16節)・・・です。

◆自分の好きなことをするのは、実に楽しく疲れません。むしろ時間を忘れるほどです。また驚くほどの力が与えられて生きがいを感じられるものです。この詩篇の作者は神のことばが、自分の楽しみ、自分の喜びとしていたことは驚くべきことです。おそらく、バビロン捕囚前にはそのようなライフスタイルを送ってはいなかったと思います。苦しみの経験を通して、そのようなライフスタイルに導かれたと信じます。神もそうした結実をもたらすために、あえて、ご自身の民をそこを通らせられたと信じます。

入 ギメル(v.17~24) 「開眼」

◆第3ブロックでは、18節の「私の目を開いてください」という嘆願をキーワードとしたいと思います。この嘆願の理由がそのあとに補足されています。目が開かれる理由は、「あなたのみおしえにある奇しいことに目を留めるように」なるためです。

◆18節を新共同訳でみると「わたしの目の覆いを取り払ってください。あなたの律法の驚くべき力に私の目を注ぎます。」LB訳では「私の目を開いて、おことばの中に隠されているすばらしい祝福を見させてください。」と訳されています。いずれにしても、幸福への<求道性>は、ダビデが「ただひとつのこと」を求めたように、最も大切なものを求めようとすることにあります。そのためには、どうしても目が開かれなければならないことをこの作者は知っていました。

◆イエスのもとに盲人バルテマイが駆け寄って嘆願した記事があります。マルコ10章44~52節参照。他の弟子たちがそれを阻止しようとしたが、イエスはバルテマイの必死の叫びに耳を留められました。そしてイエスは彼に尋ねました。「何をしてほしいのか」と。バルテマイはこう答えます。「目が開かれることです。」この答えの重要性は、この記事が置かれたコンテキストを知らなければ、理解できないように思います。

◆というのも、この盲人バルテマイの願いは、主ご自身の願いでもあったからです。これからエルサレムにおいてふりかかるイエスの受難とその意味を、弟子たちは誰一人として気づく者はなく、だれが一番偉いかと話し合っていたからです。

◆「目」について、イエスが面白いことを語ったことを思い起こします。「からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいが、もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。」(マタイ6章22節)と。ここでは「目」は、からだ全体、あるいは、存在全体を代表しています。有名な詩121篇の冒頭に、「私は山に向かって目を上げる」ということばがあります。ここでも「目」は、自分自身のすべてを意味しています。したがって、目が開かれることは幸福の求道性においてきわめて重要です。

◆目が開かれることによって、作者が経験した祝福は、24節の「まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です」という告白でした。「喜び」も「相談相手」も、親しい交わり、信頼を表すことばです。特に、ここでの「喜び」ということばも、詩119篇において最も重要なキーワードの一つです。その「喜び」とは、不変の喜び、愛されていることの喜び、愛し合う喜び、いつでも相談できる信頼の喜び、支えられ生かされている喜びです。

◆そしてこの「喜び」は、イエス・キリストがもっておられた喜びです。イエスは言われます。「わたしにとどまりなさい。わたしのことばにとどまりなさい。わたしの愛の中にとどまりなさい。」と。なぜなら、「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの中にあり、あなたがたの喜びが満たされるため」です。(ヨハネの福音書15章参照)

7 ダーレス(v.25～32) 「走る」

◆詩119篇の作者は1、2節で、「幸い」とは「全き道を行く人々」、すなわち「主のみおしえによって歩む人々」。あるいは、「主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々」と結論づけています。「心を尽くして主を尋ね求める」という<求道性>は、第4ブロックでも見出すことができます。それは「選び取り」「前に置き」(30節)「走ります」(32節)という動詞で表現されます。「走る」(*)は、より熱心な求道性を表わすことばです。

◆何を「選び取り」、誰の「前に置き」、何の道を「走る」のか、それは、戒めの道、真実の道、仰せの道です。作者の置かれている現状は、「ちりに打ち伏し」(25節)、「悲しみのために涙を流している」(28節)とあるように、失意の中にあつたようです。そうした状況の中で作者は「みことばのとおり私を生かして下さい」(25節)、「みおしえのとおり私をあわれんでください」(29節)と訴えています。この訴えの中に、神の民がバビロン捕囚経験を通して、ますます主のことばの約束の真実に心が向けられてきたと信じます。

◆そうした経験をする前までは、神のみことばの真実に心開かれることはなかったに違いありません。こうした主への渴望こそ、神がご自身の民に苦しみを味あわせられた愛の配慮だと信じます。私も、真実の道を「選び取り」、それを「私の前に置き」、その道を「走りたい」と思います。(※)「走ります」(𐤁𐤓)ということばは、詩119篇ではここだけに使われています。)

7へー(v.33～40) 「道」

◆このブロックでは、「道」をキーワードとしたいと思います。「道」とは、神とのかかわりにおける悟りを意味し、それに基づくすべての歩み(生活)も含みます。作者は、「道」にも「真実の道」と「偽りの道」とがあり、「真実の道」を「教えてください」「踏み行かせてください」「あなたの道に生かしてください」と祈っています。しかも、「終わりまで」「心を尽くして」「喜んで」「慕って」といった神への情熱的な求道性をもった表現をしています。

◆しかし同時に、その神への情熱を奪ってしまう「偽りの道」があることを述べています。

(1) 不正な利得・・・俗に言う金儲け。貪欲で、自己中心的な態度な生き方

(2) むなしなもの・・・俗に言う気晴らし。決して心を満たすことのできない偽りのもの。

ソロモンはむなしさを「風を追うようなもの」と表現しました。神以外のものはすべて風をつかむような運命にあります。

(3) そしりを恐れる心・・・「そしりを恐れる」とは、プライドを傷つけられること、屈辱を恐れる心です。この心はものごとを正しく客観的に見ることをできなくする心です。そして人との間に偏見や誤解をもたらします。

◆私たちの主イエス・キリストの歩まれた道とは異なる「偽りの道」を悟り、キリストのように、「真実の道」・・・それはどこまでも御父を信頼する道です。その道を私も「踏み行かせてください」と祈ります。

1 ワーウ(v.41～48) 「愛する」

◆このブロックでは、詩119篇ではじめて登場することば、「愛」に注目したいと思います。詩119篇では「愛します」という動詞、「愛する〇〇」という形容詞も含めて19回出てきますが、名詞は一つもありません。詩篇の世界では、愛とは抽象的なものではなく、常に、能動的(アクティヴ)な意味合いをもっているからです。

◆ユダヤ人の哲学者マルチン・ブーバーという人は、すべてのかかわりを二つの図式に要約できるとしています。一つは「我と汝」の関係、もう一つは「我とそれ」の関係です。後者における「それ」とは交換可能な存在であり、一方的、打算的な愛です。それに比べて、前者の「汝」は、交換不可能な存在であり、相互的、かつ打算のない愛です。

◆詩119篇に見る愛は、ブーバーの言葉でいうならば、「我と汝」という愛の関係です。「私は。あなたの仰せを喜びとします。それは私の愛するものです。」(47節) 交換不可能な愛は喜びをもたらします。御父が御子に対することばが天からの声として響きました。「わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」(マタイ3章17節) 御子の存在を喜びとして下さる御父の愛、その御父の愛の声こそ、私たちの存在を根底から支えることばです。御子につながるすべての者たちは、日々、内なる御父の愛の声を聞くことが必要です。

◆「我と汝」の愛の関係において、神が私に対する愛が名詞になると、「あなたの恵み」「あなたのいくつしみ」「あなたの赦し」(等)となります。その愛に応じて私が神に対する愛を動詞にすると、「あなたに感謝します」「あなたを信頼します」「あなたを待ち望みます」(等)となります。詩篇にはこうした表現が満ち溢れていることに感動を覚えます。

愛

名詞

恵み、いくつしみ、親切、思いやり、あわれみ、配慮、優しさ、赦し、…等

動詞

感謝します。信頼します。慕います。待ち望みます。喜びます。思いを潜めます。誓います。尋ね求めます …等

↑ ザイン(v.49～56) 「生かす」

◆このブロックでは「まことに、みことばは私を生かします」(50節)に注目したいと思います。詩119篇では、「生かしてください」という嘆願の表現が11回見られますが、「生かします」という告白はこの箇所のみです。新共同訳では「いのちを得させてください」と訳されています。refresh me, revive me.

◆「みことばは私を生かす」とはどういうことでしょうか。その答えのひとつがこの告白の前にあります。それは「悩みのときの慰め」となったということです。「慰め」とは、センチメンタルな意味ではなく、苦しみにあっても、それを避けるのではなく、むしろその中を貫かせていく力や励ましを意味します。詩119篇では、「みことばが私を生かす」その内実として、「私の慰め」の他に、「私の喜び」「私の歌」「私の救い」「私の光」「私の宝」「私の相談相手」「私の望み」・・・と表現されています。

◆「生かす」、「いのちを得る」、refresh, reviveのイメージは、弱ったシクラメンの花に水をやった姿にたとえることができます。まさに生き返ったように茎がしっかりと立ち直ります。そんな生かされる歩みが約束されていることを主に感謝したいと思います。

Ⅶ ヘース(v.57~64) 「顧みる」

◆このブロックでは、39節で「私は、自分の道を顧みて、あなたのさとしのほうへ私の足を向けました。」という告白から、「自分の道を顧みる」ということを考えてみたいと思います。「顧みる」とは、再点検するという意味です。「私は、あなたのことばを守ると申しました」(57節)と言ったとはいえ、いつしか、その軌道から反れているかもしれないからです。

◆私は冬、樹林内を散策していて「輪形彷徨」なるものを経験しました。自分が歩きだしたところに、思いもよらず戻ってきてしまったのです。「輪形彷徨」とは、目隠しをされた状態で歩くと、真っ直ぐ進めず、右か左に反れていってしまうように、自分ではまっすぐに歩いているつもりでも、知らぬ間に、同じ場所をぐるぐると回り続けるという現象です。それゆえ、「輪形彷徨」は山の遭難の要因のひとつとされています。

◆「自分の道を顧み」て、急いで、ためらわず、「あなたの方へ私の足を向ける」ことは、とても大切です。換言するならば、悔い改めて、自らの歩みを軌道修正することです。イエスの弟子であるペテロもイスカリオテのユダも、同じく、主を裏切った者です。しかし、本当の意味で悔い改めたのはペテロの方でした。ペテロは自分のしたことに気づき、あわてて、あわれみ深い主の方に引き返し、神の愛の懷に駆け込みました。自責のゆえに自害したイスカリオテのユダとはそこが違いました。



テース(v.65～72) 「学ぶ」

◆このブロックでは、71節の「苦しみ会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」を味わいたいと思います。特に、「学ぶ」という動詞は、詩篇では119篇にしか出てこない言葉です。7節にも「あなたの義のさばきを学ぶとき、私は直ぐな心であなたに感謝します。」とあります。これは、学べること自体が感謝だという意味です。73節にも「あなたの御手が私を造り、私を形造りました。どうか私に、悟りを与えてください。私があなただけの仰せを学ぶようにしてください。」という祈りもあります。

◆「聖書を学ぶ」と「聖書に学ぶ」とには微妙な違いがあります。73節の「悟り」が与えられることと、「学ぶ」とは同義です。71節では、苦しみを通らなければ学び得なかったことがあったことを作者は記しています。それゆえ、「苦しみ会ったことは、私にとってしあわせでした」と述べているのです。

◆「学ぶ」とは—それは、単に頭で、知識的に学ぶという意味ではなく、からだで学ぶという意味合いが強いように思います。あるいは、弟子が師匠のすることを見て倣う、盗むことを通して身に着けることです。そこにはハングリー精神があります。忍耐のいる修業でもあります。師匠から学んだ者だけが、はじめて一人前になり得る世界です。

◆イエスは言われました。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたも、わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎが来ます。」ここでの「安らぎ」とは単なる心の平安という意味ではなく、神の祝福の総称である「シャローム」を意味します。また、「あなたがた」ではなく、「あなたがたも」とあることに注意しなければなりません。「あなたがたも」とは、「わたしも」という前提があります。その前提とは、御子イエスも御父のくびきを負って歩んだということです。それと同様に、という意味合いが込められています。

◆信仰の創始者であり、完成者であるイエス・キリストにいつも目を注いで、この方を見倣うことにこそ、「学び」の真骨頂があると信じます。そのようにして、神の律法は、「私にとって幾千の金銀にまさるものです。」(72節)と告白できるのです。

◆詩篇119篇における「学ぶ」とは、キリスト道を生きること、つまり、キリストを模範として、キリストの心を心としてキリストのように生きることです。御父は私たちがキリストを通してあるがままの私たちを愛して下さいましたが、私たちが、キリストのように、御父を信頼して生きることを望んでおられます。御霊も私たちが「主の栄光を反映させながら、…主とおなじかたちに姿を変えて」くださることを信じます。(Ⅱコリント4章18節)

ヨード(v.73～80) 「喜び」

◆「私を生かしてください。あなたのみおしえが私の喜びだからです。」(77節)の「私の喜び」に焦点を当ててみたいと思います。詩119篇の作者は、神を求めることにおいて「喜び」を見出しました。それは苦しみを通って得た貴重な宝です。その宝によってものすごいエネルギーが流れているのを作者は感じています。

◆人生には二通りの生き方があります。ひとつは「しなければならないからする」という生き方であり、もうひとつは「自分がしたいからする」という生き方です。前者には「かせ」があります。それを「義務とか責任とかきまり」と言います。しかし後者は「かせ」がありません。自由です。自由があるところには意欲があります。この二つは、本来、結びつきません。したいことだけをしている、とすれば、様々なかかわりは崩れるでしょう。かかわりを円滑にするためには、「しなければならないことをする」ということを避けられません。しかし、いつまでもそこにとどまっているならば、やがて辛くなり、喜びもなく、生きる気力さえ失ってしまいます。ですから、「しなければならないこと」が、「したいこと」と結びつくような道を探求しなければなりません。両立し得る知恵を求めなければなりません。

◆それには時間と意識改革が必要です。自分を閉じ込めている律法主義から自分を解放しなければなりません。そして主にある自由を手に入れなければなりません。そして大切なことは決して希望を失わないことです。

◆人生には自分を解放してくれるチャンスが必ずあるものです。それはしばしば破れの経験を通してやってきます。詩119篇の作者の場合は、バビロン捕囚という経験でした。失望、悩み、つまずき、病気、燃え尽きに陥っているときに、そこに深い意味を見出すのは大変です。しかしやがて自分にふっ切る「破れ」の経験をします。大切なことは、苦しみから逃げずに、苦しみをきちんと引き受けることです。自分で気づかなかくとも、知らないうちに、「生きる」という大事業をやっているのです。そして、「あなたのみおしが私の喜び」だと作者は告白してます。この告白の背景には、「主よ。・・あなたが真実をもって私を悩まされたこととを知っています。」(75節)という自覚があります。

◆自発的な意欲なしには「喜び」は成り立ちません。この「喜び」は御子イエスがもっておられたものです。この「喜び」を、主にある私たちひとり一人にも与えて下さると信じます。



カーフ(v.81～88) 「渴望」

◆このブロックでは、81,82節にある「慕って絶え入るばかりです」という言葉を味わいます。この表現は詩篇にしか出てきません。しかもその数は少なく(他に詩84篇2節)、詩篇119篇にまとまっていることが特徴です。(他に123節)。この表現の主語は、「私のたまいは」、「私の目は」、とありますから、自分の全存在を通して、神ご自身を自分のものとしたいと切望する霊的渴望を意味しています。「目」は存在全体を表すユダヤ的表現です。(マタイ6章22,23節参照)

◆これを新約的な表現でいうならば、使徒パウロがキリストを得るために捕えようと追求している姿と同義だと考えます。パウロにとって、キリストとの出会いは、それまで彼が自分にとって得であったものがすべて損と思うようになるほどの価値転換をもたらしました。しかしパウロにとっては、「すでに得たのでも、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。」(ピリピ3章12節)と述べています。「キリストを得る」というこの一時に励むこと、すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前の者に向かって進み・・・一心に走っている」パウロの姿こそ、「慕って絶え入るばかり」の心だと言えます。イエスも言われました。「義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。」(マタイ5章6節) なぜなら、神のすべての祝福は渴ける者に注がれるからです。



ラーメド(v.89～96) 「全き愛」

◆このブロックは、神の愛の完全性(確実性)によって生かされた作者の喜びが綴られています。神の「ことば」「定め」「みおしえ」「戒め」「さとし」「仰せ」「さばき」「おきて」・・・は神の律法を表していますが、神の「愛」という一語で括ることができると思います。それは、「とこしえから」(永遠)「天において」(至高)定っています。しかも、自分は「悩みの中(滅びの穴)」「(深淵)から救い出されて、今や、「すばらしく広い」(広大)神の愛の中に生かされていることを確信しています。

◆私たちの日々の詩篇瞑想の目的は、いついかなるときでも神の愛の確実性の中に生かされていることを確認することです。私たちの心に神の内なる愛の声を聞くことです。使徒パウロは、愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように」(エペソ3章18～19節)と祈っています。愛の広さと、はどんな者でも受け入れる愛であり、愛の長さとは、永遠におよぶ愛です。また、愛の高さとは、人知をはるかに越えた至高の愛であり、愛の深さとは、どんなに罪深い者に対してもかかわり、救い出す愛です。



メーム(v.97～104)「愛の確証」

◆このブロックでは愛の確証、つまり神に対する私の愛の確かさとは何かということを考えさせられます。作者は97節で「どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょう。これが一日中私の思いとなっています。」と述べています。岩波訳では「なんと私は愛していることか」と訳されています。その愛の証拠は、「一日中」(新改訳)「絶え間なく」(新共同訳)「ひねもす」(岩波訳)「終日」(関根訳)、主のみおしえが私の思い(My meditation)となっているということです。要約すると、主を愛することは、絶えず、主が、(あるいは主のみおしえが)私の思いとなっているということです。

◆103節の「あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。密よりも私の口に甘いのです」という表現も捨てがたい、味わいのある表現です。詩19篇10節にも同じような表現があります。「甘い」とは、美味しいということでしょう。美味しいもの食べ物は私の心を元気にし、力づけます。甘いものを美味しそうに無心で食べている子どもを思い浮かべます。甘いものは、すぐに私たちの体の中でエルネギーに換えられます。「密よりも甘いみことば」を日々味わいながら、神とのスイートな愛(Sweet love)の交わりを楽しむ者でありたいと思います。

◆詩篇には、みことばを知性的な領域だけでなく、感覚的な領域でも味わう表現が多く見られます。それは赤子が母親に抱かれている感覚に近いものだと思います。赤子は母親の愛を、理性ではなく、日々、五感を通して感じとっています。たとえば、視覚を通して母親の眼差しを、聴感を通して母親のやさしい声を、触覚を通して母親の温かいぬくもりを、臭覚を通して母親のにおいを、味覚を通して母親の愛を確かに感じ取っています。

◆同様に、神の子どもとされた私たちも、視覚によって主のまなざしを見ます。「主の御顔を仰ぎ見る」(詩篇11:7/34:5/黙示録22:4)とは交わりの究極的な表現です。聴覚によって主の御声のささやきを聞き、触覚によっていやしや導きの御手を感じ、臭覚によってキリストのかおりを嗅ぎます。匂いはその人の存在そのものを意味します。また、味覚によってみことばの甘さを味わいます。ストレスを感じる時、甘いものが食べたくなります。主のみことばが「甘い」という表現は、みことばが私たちを元気づけ、慰め、生かしてくれる即効的な力をもっているからです。

◆神の子とされた者たちは、神の愛に満ちた懐の中で、五感のすべてを用いて、さらなる神の深い愛を感じ取ることができるのです。

』 ヌーン(v.105～112) 「光」

◆詩119篇には「光」という語は2回しか出てきません。一つは「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」(105節)。もう一つは「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。」(130節)です。いずれも良く知られた味わい深い聖句です。ヘブライ人にとって「光」は単に暗さを明るくする光源以上の意味を持っています。結論的に言うならば、聖書の「光」は交わりという関係概念です。

◆すべての被造物は光の中に創造され、混沌と無秩序の闇の中にいのちがもたらされました。その「いのちの光」はまさに神と人とのかかわりのことです。やがてそのいのちは、新約時代には「永遠のいのち」という表現に換えられていきます。

◆捕囚の経験を通った作者が出会った祝福は、神の律法(みことば)こそ、やみの中にいた自分をいのちへと導く「ともしび」であり、自分の道を照らすまことの「光」だと自覚できたことです。エルサレムにいた頃、神の民は神殿を中心とした礼拝でした。神殿の聖所には、神の臨在を示す燭台があり、夕から朝まで絶えず火が灯され続けていましたが、その本当の意味するところを知ることができたのは捕囚という苦しみの経験を通してであったと考えます。

- ◆毎年、ユダヤ教では12月の中旬頃から8日間にあたり、「ハヌカ」という祭りがあります。別名、「きよめの祭り」とも、「光の祭り」とも呼ばれます。この祭りはある歴史的事件から生まれたものですが、もし、私たちがキリストにある者として、この時期に、8日間、「光についての瞑想」の時を持つなら、すばらしい祝福を得るのではないかと思います。
- ◆それほどに、聖書の「光」という瞑想のテーマは計り知れない深さを持っています。闇の中に「光よ、あれ」と言われたその神に出会うということは、その光の中に生きることを意味します。私たちは、光に照らされ、光の中に招かれ、光の中にとどまり、光の子どもとして、世を照らす光とされた者です。その光は、「闇を照らす光」であり、「いのちの光」、「愛の光」、「まことの光」、「天からの光」です。
- ◆御父から遣わされた御子イエスは、「すべての人を照らすまことの光」(ヨハネ1:9)としてこの世に来られました。そして「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」と言われました。「天からの光」を受けたパウロも、「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって光となりました。光の子どもらしく歩みなさい」(エペソ5:8)と勧めています。
- ◆詩119篇の「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」(105節)との告白は、自分の暗やみが何であるかを知っていることと密接な関係があるようです。

口 サーマク(v.113～120) 「愛と憎」

◆詩篇のパラレリズム(並行法、あるいは対句法)は、旧約思想の本質を提示する上できわめて重要な叙述法です。113節の「私は二心の者どもを憎みます。しかし、あなたのみおしえを愛します。」は、「憎む」と「愛す」とは、一見、反語的ですが、内容的には、同義的です。つまり、「愛することは、憎むこと」でもあるのです。ユダヤ人の特性として、それはきわめてはっきりとしています。日本人のような中庸的特性は見られません。

◆ここでは、憎む対象が「二心」となっています。ちなみに、104,128,163節では「偽りの道」となっています。「二心の者を憎む」と「みことば(主)を愛する」ことは同義です。

ヤコブの手紙1章5～8節には、このことをうまく表現しています。

「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。そういう人は、主から何かをいただけたらと思っただけで満足してはなりません。そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。」

◆ヤコブによれば、主を愛するということは、「だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神を、少しも疑わずに信じること」です。そして「きっと与えて下さると信じて願うこと」です。父なる神の本質は「与える」ことにあります。しかも良いものを惜しげなく、です。神とのかかわりは信じることから始まりますが、それは終わりもそうです。御子イエスは信仰の創始者であり、完成者です。神とのかかわりの土壌は信頼すること、つまり愛することです。ここがしっかりしていないと良いものを生み出すことができません。

◆ヤコブのいう、「憎むこと」とは、神を信じながらも、神に対する疑いや不信を持つことです。そのような人は、「風に吹かれて揺れ動く、海の大波」のようであり、「その歩むすべてに安定を欠いた人」だとして、当然、「神から何かをいただけたらと思っただけではない」と結論づけています。

◆詩119篇の作者が、そのような「二心の者を憎みます」と告白していることは、主を愛しますという強い意志の表われだと信じます。「愛することは信じること、愛することは二心を憎むこと」です。私は、「主よ。不信仰なこの私を、二心のあるこの私を赦してください。私をいのちの道に導き、あなたをより深く愛する者とさせてください。」と祈ります。



アイン(v.121～128)「価値転換」

- ◆「私は金よりも、純金よりも、あなたの仰せを愛します。」と告白した127節のことばを味わいたいと思います。金や純金といえは、いつの時代にも、だれにとっても、希少価値のある宝です。また、それはこの世における価値あるものの代表と言えます。しかし、作者はこうした宝よりも主の仰せを愛すると告白しています。ここでの「愛する」とは主体的に「選び取る」ということです。きわめてダイナミックな、全存在的な価値転換が見られます。
- ◆使徒パウロも同じような経験をした一人です。彼がキリストにある宝を見出した時、それまで自分の宝と思っていた境遇とか能力、学歴、純粋な血筋といった宝をみな損と思うようになったと述べています。つまり、なんら価値あるものとは思わなくなったということです。むしろ、キリストにある宝を得ようと渴望し、熱心に追求しました。ピリピ3章参照。
- ◆イエスも、天の御国を「畑に隠された宝」に例えました。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物全部を売り払ってその畑を買うという話をされました。それほどに「天の御国」は価値があることを教えています。天の御国という宝は、キリストを知る知識の絶大な価値を意味します。それゆえ、イエスは「自分の宝は天にたくわえなさい。あなたの宝のあるところに、あなたの心もある。」と言われました。



ペー (v.129～136) 「悟り」

◆「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。」この130節にある「悟り」ということばについて瞑想したいと思います。「悟り」という語彙は詩篇の中に13回使われており、その中の7回は詩119篇にあります。みことばが開示されることと、「悟り」が与えられることは密接な関係があるようです。「悟りがなれば、滅び失せる獣に等しい」(詩49篇20節)というのが聖書の立場です。

◆「悟り」は、口語訳では「知恵」、新共同訳では「理解」、英語ではunderstandingと訳されます。みことばがうち開かれると、「わきまのない者」(新改訳)「無学な者」(口語訳)「無知な者」(新共同訳)「愚かなるもの」(文語訳)「単純な者」(尾山訳)に、「悟り」が与えられます。このことは実に驚くべきことです。

◆「悟りが与えられた者」のイメージは初代教会の使徒たちに見ることができます。彼らは当時においては無学のただ人と言われた者たちでしたが、天下を揺るがすほどの人物に変えられている姿をみることができます。特にペテロとヨハネがユダヤ当局の脅しにもひるむことなく、「この方以外に救いはありません」と断言するその大胆な姿に、彼らは驚いたと記されています。私も、ますます、悟りを与えられて、生かされる者になりたいと祈ります。



ツァーデー(v.137～144) 「熱心」

◆「私の熱心は、私を滅ぼし尽くしてしまいました。」(139節)という句を瞑想します。同じようなフレーズが詩69篇9節にもあります。「それは、あなたの家を思う熱心が私を食い尽くす。」これはヨハネの福音書2章17節で、イエスの弟子たちがイエスのなさった「宮清め」の出来事を見て、弟子たちが思い起こしたみことばでした。つまり、神を思う熱心さが苦しみを引き起こすという意味です。

◆「熱心」とは、「沸騰する、嫉妬深い」という意味です。十戒の第二戒に「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。・・それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神・・(だから)である。」(出エジプト20章4～6節)とあります。「ねたむ神」とは、一見、なんと人間的かと思いますが、この「ねたみ」は、イスラエルに対する主の愛はあまりにも激しいので、いかなる神によってもイスラエルを寝取られることを良しとしないということです。「ねたむ神」は、激しい愛をもってかかわろうとする神の愛の表現です。事実、この神である主の熱心は、ご自身の御子イエス・キリストを滅ぼし尽くす十字架の道へと追いやりました。私たちはそんな愛によって愛されていることを、再度、心にとめたいと思います。



コーフ(v.145～152) 「呼ぶ」

◆このブロックにある「呼びます」(145,146節)、「叫び求めます」(147節)をキーワードとします。前者と後者の原語を調べてみると異なったことばが使われています。後者は、助けを求めて大きな声で叫ぶという意味ですが、「夜明け前から起きて」とあるようにその助けを求める叫びは緊急性を帯びているようです。

◆詩篇では、「祈ります」ということばは4回ほどで、後は、「呼びます」ということばが圧倒的です。呼べば神は答えて下さるという信仰が貫かれています。私たちは「祈り」という務めをするのではなく、私たちが神に呼びかける、そして神がその呼びかけに応える。その逆も然りです。神と人との、この呼応関係こそ、「永遠のいのち」といわれるものです。

◆それは、赤子が泣き叫んで母を呼び求める関係と似ています。母親はその泣き声で赤子がなにを求めているのかを察します。ですから、私たちの呼びかけを聞いてくれる神がおられるということで十分なのかもしれません。「祈る」というと堅い感じがしますが、「呼ぶ」というのはより自然体で難しくありません。イエスの弟子ペテロの口から出た最初の祈りは、「主よ。助けてください」という叫びでした(マタイ14章30節)。イエスはすぐに手を伸ばしてペテロを助けました。「呼び求める」とは、なりふりかまわない、体裁を繕わない自然体の祈りといえます。それでも主は聞いてくださると知る者は幸いです。



レーシュ(v.153～160)「憐み」

- ◆このブロックには、「私を生かしてください」(154,156,159節)と三度繰り返して主に嘆願しているのが目につきます。と同時に、二つの告白があります。一つは、「あなたのあわれみは大きい」(156節)。もう一つは、「みことばのすべてはまことです。」(160節)
- ◆特に、前者の告白を味わってみたいと思います。「主のあわれみは大きい」との告白は、イスラエルの歴史に貫いていますし、私の生涯をも貫いています。「あわれみ」とは、同情、プラス行動です。福音書を読むと、イエス・キリストの行動の基調は「あわれみ」であることが分かります。「かわいそうに思う(正しくは、腸が痛むという意味)」という同情の後には、必ず、なんらかの行動が付随されています。
- ◆使徒パウロも、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪と罪過の中に死んでいた私たちをキリストと「ともに生かし」「ともによみがえらせ」「ともに天の所に座らせてくださった」と宣言しています。単なる同情で終わることなく、私たちのために行動によってその愛を示されました。まさに、行動で表わされた神の愛こそ、本当の「あわれみ」です。天の父があわれみ深いように、私たちもあわれみ深くあることが神のみこころです。私も、日々、神のみこころに従って、生かされる者でありたい。

シーン、スィン(v.161～168)「賛美」

◆このブロックにある二つの動詞、「愛しています」(163,167)節、「喜びます」(162節)があります。主のみことばを喜びとし、それを限りなく愛する者には、豊かな平和(シャローム)があり、つまづくことがないと告白しています。しかし、より大切なことは、主のみおしえを喜びとし、愛する具体的行為として作者が実践したことは、「日に七度」主を賛美することでした。

◆「日に七度」という規定を、そのまま中世のベネディクト会の修道士たちは実践しようとしてしました。この規定は、一見、自分たちを拘束するよう見えますが、それは、散漫に陥りやすい私たちの心を絶えず主に向けさせるために、「聖務日課」として自ら課したものでした。

◆なぜ「日に七度」なのか？ 聖書における「七」という数は、創造においても、幕屋においても(七つの燭台)、救いと恵みの年のサイクル(七十周)においても、赦しにおいても(七度を七十倍)、組織においても、……特別な意味を持っています。つまり、「七」は神のみこころを満たす聖なる数と考えられていたようです。

◆いずれにしても、主の教えに対する愛と喜びのあかしとして、「日に七度、主をほめたたえる」という生活パターンを作り出したことは、特筆すべきことだと思います。



ターウ(v.169～176) 「選択」

◆最後のブロックでは、173節にある「私はあなたの戒めを選びました。」に注目したいと思います。「選ぶ」というのはきわめて主体的行為を表わします。それゆえ、「選び」は次節の174節の「あなたの救いを慕っています」「あなたのみおしえは私の喜びです。」とも連動します。それは、なんら強制的なものではなく、自発的、主体的告白であり、「愛する」と言う動詞と同義です。

◆聖書における神の民としての自立とは、神から選ばれて選ぶ、愛されて愛するという信仰的・主体的決断に基づく服従の選択意志を意味します。イエス・キリストは弟子たちに「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選んだのです。」(ヨハネ15章16節)と言われました。ヨハネの手紙では「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私の罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。私たちの人生の様々な局面において(失敗の経験も含めて)、神の先行的な選び(無条件の愛)に気づかされていくことが大切です。そこから新しい歩みの新芽が芽生えてくるからです。そこに身を置くならば、自分の存在を脅かす者に対して、決して恐れることなく、むしろ、それを自分を成長させてくれた「愛すべき敵」と思えるようになると信じます。